

疝気 下腹が冷えて痛む

「疝気(せんき)」は「疝気持ち」という言葉もあるように、下腹の痛む慢性病とされました。現在では神経性腸炎や寄生虫症、筋肉痛、男性では睾丸炎(こうがんえん)、脱腸(ヘルニア)などの下腹の痛む症状が含まれていたといわれています。

疝気の中でも睾丸が腫れる症状は、脱腸により腸が睾丸に降りた場合や陰嚢水腫といわれています。陰嚢水腫は蚊による感染症(フィラリアの一種によるもの)で、かつては日本でも流行していました。東海道の戸塚宿ではこの病気で大きくなった陰嚢の上で鉦(かね)をたたき、見世物にしていた物乞いの男がいたことで有名です。

治療法としては、下腹の冷えを解消するために火鉢や温石(おんじゃく;保温に用いる焼いた軽石類)で温めたり、湯治や灸で治療しました。



江戸時代の風刺画に描かれた疝気の患者
疝気にかかって大きくなった陰嚢と土瓶の
大きさを比べている。



きいたな名医 難病療治
医師と患者に見立てて、当時の幕府を
風刺した錦絵。